津軽方言の文法に関する一考察

日野資純

一　はしがき
二　方言文法の記述法についての再検討
三　津軽方言の文法

一　はしがき

方言文法の研究についてはいろいろな問題がある。東条操先生は「方言と方言学」において次のように記しておられる。

> 方言語法の研究は音韻同様に困難である。基準が判然としないだけにより以上に困難だとも云へよう。語法の方面では従来の文語法や口語法の組織によって調査することさへ問題である。チェンバレンが琉球語研究に於て名詞の孤立法を説き松下大三郎氏が日本俗語文典に体詞の語尾変化を説いたやうに、名詞の格変化を説く事は方言語法では必要な事となる。又、文語法や口語法で規定したやうな助詞・助動詞の分類は方言語法には必ずしも適切でなく、標準語法の表現形式と方言語法の表現形式と一致しないものも少くない。方言語法の組織はやはり帰納的に新しい方式を立てねばならないやうに思はれる。（圏点筆者。七一頁）

この一節はまことに暗示的である。「標準語法」の既成のわくだけにもとずいてなされる方言文法の記述は真にその方言に即したものではありえない。それではその方言特有のものを見落すおそれがある。例えば琉球語における「名詞の格変化」のような現象は「標準語法」では処理し切れないものの一つであろう。（11頁参照）

ではいかにしてその「新しい方式」を立てればよいのであるか。すでに藤原与一博士や都竹通年雄氏などによってすぐれた研究がなされているが[註1]、なお問題が残されているようである。私は東大で服部四郎博士の御指導を受けるに際して、「それぞれの方言に即した文法、音声言語に即した文法」を打ち立てることが必要であることを痛感するに至った[註2]。

私はその見地から「国語と国文学」の二十九年五月号にそれに関する試案を述べてみたが、それについてはいろいろな方々から御批判をいただき、なお考慮すべき余地のあることが分った。又それは方言文法の記述の基礎とすべき理論を述べることを主にしたものであったから、なおそれにもとずいて実際にどこかの方言の文法を記述してみることがぜひ必要であった。前説に対する反

省とその実証、――これがこの論文の主旨である。方言の例としては私の居住地である津軽の方言を取りあげた。

さて私の方法に対する批判の主な論点はおよそ次の如くであった。

一、私の方法は各々の方言の具体的な音声言語的事実から言語単位を抽象して来ようとするものであるが、各々の方言についてそれを一々やっていたのでは大変な手数がかかって非実用的ではないかということ。

二、私の用いた言語単位の名称には一般に耳なれないものが多く、(半自立語、自立的接尾形式など)理解されにくいであろうということ。

一は一応もっともものように見えるが、方言におけるなまの資料即ち音声言語の資料を丹念に集め、それにもとずいて作業することはいわば方言研究の常道である。私はただその常道を歩みつつ、資料の整理法に工夫を加えてみたわけである。それはただちに二に関連してくる。

言語の分析にあたっては拙速よりも精確を尊びたい。一体、従来の文法用語にはいろいろな点から見て十分精確とはいえないものがある。例えば共通語の「接続助詞」の中で、「から」と「て」(「見て。」)とはそれぞれ職能を異にしている。即ち、前者は「動詞・形容詞」、及び大部分の「助動詞」の「終止形」につくが、後者は動詞の「連用形」(あるいはその「音便形」)につくだけであって、職能が大分異っているわけである。職能というものは言語単位の分類上かなり重要な基準とすべきものであるにもかかわらず、その点が十分守られていないのは遺憾である。職能が異るものを「接続助詞」として同類にくくることについては反省が加えられなければならない。私はこのような見地から、やや厳密さを欠く「助詞」という名称を捨てて「から」のように職能の異る色々な単位に接するものを前記の論文で「自立的接尾形式」とよび、「て」のように限られた単位だけにしかつかないものを単に「接尾形式」(接尾形式C_2)とよんで区別した。(後者について二十九年十月の第三十一回日本言語学会大会で発表。「言語研究」第二十六・二十七号に要旨掲載。「附属形式の下位分類」)

さて先にも記したように私は自分の説の妥当性を吟味するために、先に発表した理論を津軽方言に応用してみたのであるが、それに先立っていくつか補訂さるべき点を発見したので、まずそれについて述べ、しかるのち津軽方言の文法を記述してみようと思う。なお私の考えに対していろいろ御鞭撻下さった時枝誠記先生、服部四郎先生、金田一春彦先生、楳垣実氏、此島正年氏、杉井鈴子氏などに厚く御礼を申上げる。

二　方言文法の記述法についての再検討

以下の論述に対し「国語と国文学」二十九年五月号の拙稿を参照していただければ大変幸いであるが、それがお手元になくても理解して頂けるようにできるだけ配慮するつもりである。

さてその論文で方言における言語行動を研究するさいの注意を記した所で、表情や身ぶりなどを音声言語行動の中に含めるというふうに述べたが、それはあやまりで、これは除外さるべきであった。即ちそのさいには「『具体的な音声言語行動』を表情や身ぶりもふくめて観察すること」が必要だというべきであったと思

う。（同誌五一頁）

又附属的単位（大体「助詞・助動詞・接頭語・接尾語」などにあたる）の中の接頭形式や接尾形式（五五頁）のややくわしい下位分類については、先に述べたように「言語研究」に要旨をまとめておいた。

共通語の動詞の活用の種類について先の論文ではａｂｃｄｅの五種とし、さらにａを四類に、ｂを二類に分ったが、これではまだ不十分である。（五七頁）即ち次のようにａは六類に分つべきかと思われる。なお(5)(6)における「カカ・、カイ」などは右の「言語研究」の「要旨」においてそれぞれ接頭形式C_1としておいた。「カキ」は「えせ単語」とすべきかと思う。即ち「カキーマス・カカーナイ・カイータ」全体をそれぞれ「単語（動詞）」と見たい。

a_1	（書）	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
		カク ―トキ ―コト	カケ	カコー	カキーマス（―タイ）	カカーナイ（―セル）
		(6)	(7)			
		カイータ	カケ ―バ	（カキャー）		
a_2	（行）	イク	イケ	イコー	イキーマス（―タイ）	イカーナイ（―セル）
		イッータ	イケ ―バ	（イキャー）		
a_3	（飲）	ノム	ノメ	ノモー	ノミーマス（―タイ）	ノマーナイ（―セル）
		ノンーダ	ノメ ―バ	（ノミャー）		
a_4	（研）	トグ	トゲ	トゴー	トギーマス（―タイ）	トガーナイ（―セル）
		トイーダ	トケ ―バ	（トギャー）		
a_5	（買）	カウ	カエ	カオー	カイーマス（―タイ）	カワーナイ
		カッータ	カエ ―バ	（カヤー）		
a_6	（言）	ユウ	イエ	イオー	イイーマス（―タイ）	イワーナイ
		イッータ	イエ ―バ	（イヤー）		
b_1	（起）	オキ＝ル	オキ＝ロ	オキ＝ヨー	オキーマス（―タイ）	
		オキーナイ	オキータ	オキ＝レーバ	（オキーリャー）	
b_2	（受）	ウケ＝ル	ウケ＝ロ	ウケ＝ヨー	ウケーマス（―タイ）	
		ウケーナイ	ウケータ	ウケ＝レーバ	（ウケーリャー）	
c	（得）	エ＝ル（ウ＝ル）	エ＝ロ	エ＝ヨー	エーマス（―タイ）	エーナイ
		エータ	エ＝レーバ（ウ＝レーバ）	（エーリャー）		
d	（為）	ス＝ル	シ＝ロ	シ＝ヨー	シーマス（―タイ）	シーナイ
		シータ	ス＝レーバ	（スーリャー）		
e	（来）	ク＝ル	コ＝イ	コ＝ヨー	キーマス（―タイ）	コーナイ
		キータ	ク＝レーバ	（クーリャー）		

右の表においてa_1とa_2―a_5との相違は(6)の形にある。又a_5とa_6は(5)に kaw-a, iw-a の形が現われる点が他と異り、さらにこの二者自身(1)と(2)の関係で異っている。又Cはb_2に近いが、(1)と(7)に二形が存しうる点で異っている。

この外「クレ＝ル（呉）」はb_2類としてよさそうにも思われるが、(2)の形が「クレ＝ロ」よりも「クレ」「オークレ」等になることが多いので厳密にいえば異類とすべきである。

「下サル」「オッシャル」「イラッシャル」なども(2)と(4)が「下サイ。」「オッシャイ。」「イラッシャイ。」となるので厳密にいえば異類とすべきである。

「蹴ル」はa_2類にはいるのであろうが、(2)は「ケロ」ともなるからやや不安定である。共通語では(2)や(3)の形があまり現われな

いので習慣が固定しないのであろう。各地の方言の文法を扱うさいにもこの習慣の固定度ということを十分考慮する必要があろう。なお諸方言における「蹴ル」の活用の分化については「口語法調査報告書」や雑誌「方言」（昭八・四）における岩淵悦太郎氏の御研究などが参考になる。

三　津軽方言の文法

1　音韻体系

文法の記述は音韻体系にもとずくべきものであるから、まず津軽方言の音韻体系を把握しなければならない。それには各音節を全体的に考察してかからなければならないのであるが、紙数に制限があるのでこの手続きを省略し、推定される音韻体系だけを記すことにする。

'a		'u	'e	'o	ja	ju	jo	jɛ		wa wɛ
ka	ki	ku	ke	ko	kja	(kju)	kjo	kɛ		kwa
ga	gi	gu	ge	go	gja	(gju)	gjo	gɛ		gwa
ŋa	ŋi	ŋu	ŋe	ŋo	ŋja	(ŋju)	ŋjo	ŋɛ		ŋwa
sa	si		se	so	sja		sjo	sɛ	sje	
za	zi		ze	zo	zja		zjo	zɛ	zje	
ta			te	to				tɛ		
(ca)	ci			(co)	cja		cjo			
da			de	do				dɛ		
na	ni	nu	ne	no	nja	(nju)	njo	nɛ		
ha	hi	hu	he	ho	hja	hju	hjo	hɛ	hje	
(Fa	Fi	Fu	Fe	Fo	Fja	Fju	Fjo	Fɛ	Fje)	

pa	pi	pu	pe	po	pja	pju	pjo	pɛ
ba	bi	bu	be	bo	bja	bju	bjo	bɛ
ma	mi	mu	me	mo	mja	mju	mjo	mɛ
ra	ri	ru	re	ro	rja	rju	rjo	rɛ
			N		Q			

/ŋa/ の系列及 /Q/ は語頭にあらわれない。

又 /ŋa/ の系列は必ず /N/ のあとにあらわれる。

/Q/ は母音音素のあとにのみあらわれる。

音声の註記

/'u/, /.e/　〔üë〕 /'u'e/ 上。

単独の /e/〔ë〕は共通語の /i, e/ に対応。

/jɛ/　〔jojɛ〕 /jojɛ/ 弱い。(/'ɛ/ : 共 /'ai, 'oi/)

/wɛ/　〔kowɛ〕 /kowɛ/ くたびれる。

/kwa/　〔hëŋkwa〕 /heNkwa/ 変化。

/ke, ge,…/ 〔këŋko :〕 /keNko'o/, 〔gëŋkï'n〕 /genkin/ 健康。現金。

/si/　〔nïsïn〕 /nisin/ にしん。

〔sïmï〕 /simi/ 炭。

〔jasï :〕 /jasi'i/ 安い。

〔sï :ʃa〕 /si'isja/ 終車。

(/si/ : 共 /si, su, sju/)

/zi/　〔onaⁿdʒï〕 /'onaNzi/ 同じ。

〔sïⁿdʒïganï〕 /siNzigani/ しずかに。

〔dʒï : nën〕 /zi'ineN/ 十年。

(/zi/ : 共 /zi, zu, zju/)

/çi/　〔tsïtsïoja〕 /cici'oja/ 父親。

〔tsïⁿdʒïmï〕 /ciɴzimi/ 堤。

〔tsï : ʃa〕 /ci'isja/ 注射。

(/ci/ : 共 /ci, cu, cju/)

/sje/ 〔ʃënʃë〕 /sjeɴsje/ 先生。

/zje/ 〔dʒënï'ko〕 /zjeniko/ ぜに。

/hje/ 〔orï'hjë〕 /'orihje/ おりろ。

/N/ は /ga, da, ŋa, ba, pa, za/ などの系列ともむすびつきうる。又語頭にもあらわれうる。

/ɴda/ 〔nda〕 そうだ。

〔karaⁿda〕 体 (/karaɴda/)

/ɴŋa/ 〔ŋŋa〕 お前。

/ɴba/ 〔mba〕 末娘。

〔kümbï〕 首。(/kuɴbi/)

/ɴpa/ 〔nëmpüta〕 ねぶた。(/neɴputa/) 〔夏祭〕

/ɴza/ 〔haⁿdzïrërü〕 外れる。(/haɴzireru/)

{/-ga, -gi…/ : 共 /-ka, -ki…/ 〔haga〕 蔓 (/haga/)
{/-da, -de…/ : 共 /-ta, -te…/ 〔hada〕 旗 (/hada/)

これには例外がある。

/hutoci/ 〔hütotsï〕 一つ。

/hana-ko/ 〔hanako〕 花。など。

以下の記述を簡略にするために、ここに記した音韻体系を次のようにカナ表記で表わし、以後これに従うことにする。

ア		ウ	ㇶ	オ	ヤ		ユ	ㇺ	イㇶ	ワ	ウㇶ
カ	キ	ク	ケ	コ	キャ (キュ)		キョ		ケㇶ	クヮ	
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ギャ (ギュ)		ギョ		ゲㇶ	グヮ	
カ°	キ°	ク°	ケ°	コ°	キ°ャ (キ°ュ)		キ°ョ		ケ°ㇶ	ク°ヮ	
サ	シ		セ	ソ	シャ		ショ		セㇳ		シㇳ
ザ	ジ		ゼ	ゾ	ジャ		ジョ		ゼㇳ		ジㇳ
タ			テ	ト					テㇳ		
(ツ)ㇲ	チ			(ツ)ォ	チャ		チョ				
ダ			デ	ド					デㇳ		
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ニャ (ニュ)		ニョ		ネㇳ		
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ヒャ (ヒュ)		ヒョ		ヘㇳ		
(ファ	フィ	フゥ	フㇶ	フォ	フィヤ	(フィユ)	フィㇺ		フㇶ		フイㇳ
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ビャ	ビュ	ビョ		ベㇳ		
パ	ピ	プ	ペ	ポ	ピャ	ピュ	ピョ		ペㇳ		
マ	ミ	ム	メ	モ	ミャ	ミュ	ミョ		メㇳ		
ラ	リ	ル	レ	ロ	リャ	リュ	リョ		レㇳ		

ン ッ

2 文法体系

はじめに津軽方言の文法に関する従来の研究の主なものを列挙すると次のようになる。

A 津軽語彙 北山長雄氏編。(音韻・アクセント・語法・語彙の各篇より成る。その中の語法の部。昭八)

B 青森県方言集 県師範校編。(その中の語法の部。昭十一)

C 東北の方言 小林好日氏著。(語法の部。昭十九)

D 津軽方言語法小考 此島正年氏。日本文学論究第八冊。昭二十七。

E 青森方言の敬語法 同氏。弘前大学人文社会第五号。昭二

十九。（DEは論文）

F　弘前語彙　松木明氏著。五十音順四〇九九語。分類索引附七九〇頁。昭二十九。（これは語彙だけであるが語構造の観察に参考になる）

さて以下に掲げる津軽方言の資料の中、私が自然観察によって得たものには◎印、通信調査（主として弘大文理学部の学生諸君による）によったものには〇印、文献から取ったものにはA－Fの記号を記すことにする。（傍線はアクセントのある部分を示す）

私は先にあげた論文で言語単位の中、単独で言い切りになりうるものを「自立的単位」とし、その中最小のものを「単語」としたが、方言の単語の中で特に注意すべきは「半自立語」である。

一、(1)　半自立語A（共通語では「シズカダ」の「シズカ」など）

〇コゴ　シンジガ・ダ。（ここは静かだ）
〇コゴ　タエシタ（非常に）シンジガ・ダドゴ（静かな所）ダ。
〇シンジガ・ダバエエ。（静かならよい）
〇シンジガ・デエエ。（静かでよい）
〇シンジガ・ニ　シヒェ。（静かにしろ）

(2)半自立語B（共通語の「コンナコト」の「コンナ」など）

〇コッタラコド。コシタコド。
〇アッタラモンダッケァ　ダァクウバ。（あんな物、だれが食うか。F）
〇アシタ　エグネェ　ワラシァ　ドゴニモネ（あんなわるい子供はどこにもない。F）
〇ソッタラ、ソシタ（そんな）
〇ドッタラ、ドシタ（どんな）

二、自立的接尾形式

私は必ず他の単位に続けて発音されるものを「附属的単位」とし、その中かなり自由にいろいろな種類の単位のあとに接しうるものを自立的接尾形式とし、そうでないものを接尾形式とした。

この方言の自立的接尾形式は、主格や目的格に立つ場合はふつう現われない。

◎ニシン×マンダ　タガクテ（にしんはまだ〔値が〕高くて）
◎アッパ×エル　（母は居る）
◎アンマリゴッツォ×エッパエンダカラホック×ハンズレルダッケァ（あんまりごちそうが一ぱいだからホックがはずれるわよ）
◎カミコ×シエテ（紙をしいて）

方向や程度を示す場合もしばしば現われないことがある。

◎マシンガタ×エグ。（枡型〔地名〕へ行く）
◎ジーネンバリ×ナルケド（十年ばかりになるけれど）（四、語形変化の項参照）

注意すべき自立的接尾形式はおよそ次の如くである。

i　主として文末のみに現われるもの

a1　「ネハー」

◎ジカン　カガルネハー（時間がかかるわね）――女に多い。
◎ゴジーエンネハー。（五十円〔です〕）

第二の例では「ネハー」の前にかなり長い音声のとぎれが現われるのを観察した。

◎エチカンクラエンデクルカラネハー。（五日ぐらいで来るから

ね）

「ネサー」

◎エエッテッタネサー。（いいと言ったわよ）

◎サケコカナンカエレダラネサー。（酒か何かを入れたら〔どうでしょうね〕）

この「ネハー・ネサー」両者は弘前地方の特色としてよいかも知れない。

「サ」

◎ナナセンエンダッケカサ。（七千円だったかなあ）

◎ヨオエシテオゲバエエンダベサ。（用意しておけばいいんだろうよ）

主として女が使う。

「モナモ」

◎エグモナモ。（行くとも〔意志〕）

◎ソンダモナモ。（そうだとも）

「ナ」

○センセ、ニモチコ、モジシガナ。（先生荷物を持ちましょうかね）

○アメバリフッテルハンデ　ケンド　エグネフテ　マエネェナ。（雨ばかり降っているので道がわるくて困るな）

「ダバ」

○ドシタダバ。（どうしたんだ？）

○ナ、ドシチモリダバ。（お前はどうするつもりだ？）

a2 「ジャ」

○キテケロジャ。（来てくれよ）

○コゴサコエジャ。（ここへ来いよ）

○コゴ　タエシタ　シンジガダドゴダジャ。（ここは非常に静かな所ですよ）

○ケコデネェバカエネェジャ。（おかゆでなければたべられないんだ）

◎テマモオオグカガルンデネェジャ。（手間も多くかかるんじゃないか？）

○アジノホ、アルギヤシンタジャ。（あっちの方が歩きやすいようです）

「ジャ」は「体言」にはつかない。西部方言の「ジャ」と相違する点である。

ii　主として文節末のみに現われるもの

b1 「サ」

◎オチユサエレル。（おつゆに入れる）

◎ヒフビョーサカガッタ。（皮膚病にかかった）

◎ドコサヌエダノ。（どこ〔の歯〕を抜いたの？）

◎トギョサエッタラ、（東京へ行ったら）

◎チンジミノトゴロ、シコシサエゲンバサー（堤の所を少し行くとね）

「サ」はこのようにいろいろな場合に用いられる。普通「トギョサ」のような場合だけが注意されているようであるが、その点だけを取り上げたのでは十分でないことが分る。最後の例のように「副助詞」的な用法もある。故に、「京へ筑紫に坂東さ」のことわざも現在では多少割引して考える必要があろう。この点についてはすでに此島氏も指摘しておられる。（論文D）なおこれは

若い人に多いようであるが今日では四十台位の人にも起っていることである。

「バ」

○ハナコバオル。（花を折る）〔D〕

◎ナバカ。（お前をか？）

これは特に目的格を強調する時に限って用いられるようである。「ゴト」も類似の意味で使われる。

○ホンゴトワセェダ。（本を忘れた。）

「バリ」

◎ソコバリチカウガラ（〔歯の〕そこ〔其処〕ばかりを使ろから）

◎ジーネンバリナルケド（十年ばかりになるけれど）

◎ホントノエエノバリ（本当のいいの〔物〕ばかり）

b2「ハンデ」〈「ハンテ」

◎マシンカタエグハンデ（枡型〔地名〕へ行くから）

◎トンブラウヒトナエハンテ（おとずれる人もないので）

◎チケェハンデ（近いので）

◎マルナトダハンデ、ソレ。（丸納豆だから、それは）

「バテ」

○アルバテカエネェ。（あっても食えない）

○エギタエバテエガエネェ。（行きたくても行かれない）

○クルシバテ（苦しくても）

○ソンダバテ（そうだとしても）

「ドモ」

○カグドモ（書くけれども）

○クルシドモ（苦しいけれども）

○ソンダドモ（そうだけれども）

◎キタベドモ（来たろうが）

b2の類は主として「用言」の第一形につく。

三、接尾形式

a1（最初の音素が他と交替しうるもので職能に応ずる語形変化をなさぬもの――共通語では「ホン一バコ」の「一バコ」など）

○「シタバラ」（下腹）の「バラ」、「カラボネヤミ」（空骨病。なまけ者）の「ボネ」など。〈ハラ、ホネ）

a2（同じく語形変化をなすもの）

「エゲジャガシエ」（わるがしこい）の「ジャガシエ」など。（サガシエ〔賢〕）

b1（音素の交替や職能に応ずる語形変化のないもの）

i 主として文末に現われるもの

「ナガ」〔命令を表わすが、「カガナガ」は「カゲ」に比べていくらか、婉曲な言い方〕

○カガナガ。（書け）

○ヤメナガ。オリナガ。コ（来）ナガ。（キナガ）ベンキョ（勉強）シナガ（サナガ）

「ケ」（回想）

○アッケ（あったっけ）シッケ（したっけ）

◎サンボンモニホンモエッショニキタリシッケナ。（〔汽車が〕三本も二本も一緒に来たりしたっけな）

「ヘ・ヒェ」（命令。女に多い。「ナガ」に比べて敬意が含まれる）

○カギヘ（書きなさい）ヤメヘ。オリヘ。コエヘ。（コヘ、キヘ）ベンキョシヘ。（―セヘ、―ヘヘ）。ケエヘ（おくれ）

「ベ」（推量）

◎エダクネェベ？（痛くないだろう）

◎ビョーキダンダベネサー。（病気なんだろうよ）

◎オクサン、ナクナッタンデシベ？（奥さん、なくなったんでしょう）

「エンタ」（〈ンタ）（推量）

○アジノホ、アルギヤシンタジャ。（あっちの方が歩きやすいよだ）

◎チンカワネェンタカッコーデ（違わないようなかっこうで）

「ダケンタ」（比況）

○イシダケンタ。（石みたいだ）

◎バシャダケンタクルマ。（馬車みたいな車）

「ミンタ」（〈ミエダ、ミダ、ミッタ）

○コノマメ、カダフテ、イシミンタナー。（この豆はかたくて石みたいだな）

（こういう場合「イシドフトチダ（石と一つだ→石のようだ）」ということあり）

◎ジーネンマエモエマモフトチデシワ。（十年前も今も同じですな）

「オン」

◎ワガッテルベオン。（分っているだろうがね）

◎ブチケルオン。（ぶつけるよ）

ii 主として文節末に現われるもの

「バ」（仮定）

◎エマンダンバジーゴエンダ。（今なら十五円だ）

◎ゴショガワラマンデダンバ、アンケレンバシェ。（五所ケ原まで行くのなら、〔荷を棚へ〕上げたら〔どうです〕）

――車中にて――

◎シンジガニアルケバ、エエオトガシマシ。（しずかに歩くといい音がします。――寺の案内僧の口上）

こういう場合「アルクト」とはふつう言わない。故に「雨フルト困ルナ」とは言わずに「アメフレバコマルナー」という。なお「アルキャー」「フリャー」などという連声形式も現われない。

iii 単語の構成にあずかるもの

「コ」

カミーコ（紙）、マチーコ、（マッチ）、ニンキョーコ（人形）、サケーコ（酒）、チャワンーコ、（茶碗）、ワラシーコ（子供）、ボローコ（古くなって朽ちかゝっているもの）

この「コ」は周知の如くかなり多くの「名詞」につく。多少愛称の意をもつ。

「ド」（複数をあらわす）

ナードド（君たち）、ンカードド（お前たち）

○接尾形式c（職能に応ずる語形変化をなすもの）

c1 「ル」

オギール、ヤメール（→「ロ、レ」等に変化する。オギーロ又はオギーレ、ヤメーロ又はヤメーレ）

弘前市の二十才台の男子三十名に関する報告によると、命令の言い方は大体、「オギーヘ・ヤメーヘ」であるが、その中「ヤメ

ーレ」が二に対して「ヤメーロ」が一、「オギーレ」「オギーロ」はそれぞれ三ずつあった。女子高校の一年生では、やはり「オギーヘ・ヤメーヘ」が多いが、二十九名中「ヤメーレ」三、「ヤメーロ」六、「オギーレ」五、「オギーロ」六であった。

C_2「ヘル」

サガーヘル（咲かせる）、サガーヘレーバ、サガーヘロ

「ネェ」

◎ナンモ、ワガラネェ。（何も分らない）

◎ベンキョシテエガネェバ（勉強して行かなければ）

○エガネェグテモエエ。（行かなくてもよい）

C_3「サヘル」

ベンキョサヘル（勉強させる）、～サヘレーバ、サヘロ

C_4「シ」（敬譲）

○ワ、アシダバコレシ。（私、明日なら来られます）

○センセ、エマ、カエリシタ。（先生は今お帰りになりました）

○センセ、ニモチコモジシガ？（先生、荷物を持ちましょうか）

「ヘン」（打消）

○カエッテキヘンジャ。（帰って来ないのだ）

○ケコデネェバカエヘンジャ。（おかゆでなければたべられないのだ）

「タ」

◎ドゴミテエタノ？

◎「ドゴサエダガ？」「コゴサエダ」

◎チーシャヒトチシテモラッテ（注射を一つしてもらって）

はじめの二例の「タ」「ダ」は「現在」の意で用いられている。「どこを見ているの？」「どこに居るか？　ここに居る」の意である。

◎エマ、キテアッタンダケドナー（今来ていたんだがな）

◎ショーソーエンテン、ハクブチカンデ、ヤッテアリマシタ。（正倉院展を博物館でやっていました）――学生の教師に対することば――

このように「ている」の意を「テアル」で表わすことが多い。これは次のように連声形式としても現われる。

◎（歯を）ニホン、ヌエタッタ（二本抜いておいた）

なお「タッタ」は津軽よりも南部地区に特に多いようである。

○接尾形式d（「形容詞」の語尾）

これに当るものは「ク（グ）」だけである。

ヤシーグ（安く）

サミクテアッタ（寒かった）

四、語形変化

形容詞の語形変化の体系は非常に単純である。

○ナエ（ネェ）〔ない〕

ネェーグ、ーベエ、ーバ、ードモ、ーダ

○マエネェ（だめだ。いけない）

マエネェーグ、ーベエ、ーバ、ードモ、ーダ

即ち言い切りの形に「グ、ベエ、バ」などがつくと見ることが出来る。

◎エダグ　ネェベ（痛くないだろう？）

◎〔歯を〕ヌゲバソゴヤメルコドモネェシ（抜けばそこが病むこともないし……）

次に動詞の活用を説かなければならないのであるが、已に規定の紙数を超過しようとしているので、その考察は後日にゆずり、最後に音声的関係を主とする語形変化の問題について簡単に述べてみよう。

すでにいくつか「連声形式」としてふれてきたものがその中の一つであるが、ここまでまとめておくと、例えば先にあげた

◎ニホン、ヌエタッタ。

の「タッタ」は「テアッタ」と意味的に対応しているので、その項でものべたように「テアッタ」の連声形式とみとめられる。「テアッタ→タッタ」という音声的変化の結果こういう対応を示しているわけである。ただしこれは「タッタ」という形においてもかなり習慣が固定しているが、次の例などは必ずしもそうでない。

○アシダバ　クニエエ。（明日なら来られる）

この「クニエエ」は「クルニエエ」の連声形式であるが、それだけで一単位をなすほどには習慣化していないようである。

さきに津軽方言では主格や目的格、方向格などを示すさいにふつう自立的接尾形式が現われないということを述べたが、その代りその際に「格変化形式」が現われることが多い。

○ユギァ、フッタ。（雪が降った）

◎ベコァ　タンダ……（牛はただ……）

◎チンキカラチンキェクンビニナルンダモノ。（次から次へ首になるんだもの）

この三例において「ユギァ・ベコァ・チンキェ」の三者はそれぞれ「ユギ・ベコ・チンキ」の格変化形式である。その中、前二者は主格を示し、最後の例は方向格を示しているわけである。ただ目的格の場合にはこういうことがないようである。（二、自立的接尾形式の項参照）方言文法の研究において「名詞の格変化」をとくことが必要だということは、已に引用した通り東条先生が琉球語などについて早くから述べておられるのであるが、（1頁）それはおそらくこのような場合をもさしておられるのではないかと思う。（ただし琉球では、「牛は」「魚（イユ）は」「鐘は」などにあたる場合だけに「ウセェ」「イョオ。」「カネェ」等になり、「――が」の時は「ウシヌ」「イユヌ」「カネヌ」という。（首里方言）

以上、はなはだ不十分ではあろうが、津軽方言の文法に関する一考察をしたためてみた。本稿で述べた「事実」の中には従来から已に指摘されているものも多いと思うが、私はなるべくなまの資料について、それを私の考えている体系によって説明することを心がけてみたつもりである。なお動詞の活用については又改めて考えたい。各位の御叱正を願ってやまない次第である。（今後下北郡地方についても調査を行いたいと思っている。）

――一九五五・一・八――

（註1）藤原与一氏「日本語方言文法の研究」昭二四、岩波
〃　「文法」（東条操氏編「日本方言学」の中）昭二九、吉川弘文館。
都竹通年雄氏「方言文法論の方法」（「国語学」十二）昭二八。
（註2）服部四郎氏「方言研究私見」（「言語生活」二十四）昭二八、九。

――弘前大学講師――